し、されども土餘り和らか過れば、根の性うつくる物なり、山城の富野、寺田などいふ里、專ら當歸を作る所なり、其所の土は、細沙に土と河ごみの交りて、赤土も少々まじれる、牛蒡の出來る土の性と見えたり、凡土の性よはき所、惡土の交りたる地などは出來あしく、藥性も宜しからず、大方の土地には作るべからず、是を掘取事は、十月に入て、すきか鍬にて根のきれそこねざる樣にかたはしより念を入れほるべし、悉く掘取て、淨く洗ひ乾しをき、莖の所を細繩にて四五寸廻りにたばねをき、釜に湯をにやし立、其中に莖の方を下になして入れ、湯煮をするなり、其ゆで加減、根の方をひねりて見るに、指を捻る樣に、和らかに覺る時先あげて、さて又根さきの方を下にして少煮て、是も捻り心みて上るなり、殘らず湯煮し上て、日當の所に、竹にてならしを、二段と三段も横にゆひ、衣桁のごとくして、大きは二かぶ、小さくば四科、莖の中程をわらにてゆひ、竹にうちかけ干なり、又筵に干時は、頭の方を上になし、ならべて段々にをくべし、よせかくる心なくては、根先おゝ、物なり、さて干上て後、蘆頭に莖の方を五分ばかりかけてきり揃へ、箱に入れをくなり、久しく收めをくならば、箱の内に樟腦を段々ふりかけ、箱のすみ〳〵をば、紙にてはりをくべし、凡一段の畠に、大かたの直段にても、代銀四五百目は有と云なり、是は當歸を藥屋の仕立收る法なり、本法は湯煮したるは、性うすくなりてあし、生ながら數日よく干すべし、壺に入をきて、梅雨の前四月に一度、梅雨の後一度、八九月に一度、凡年中に三度干べし、かやうにすれば藥性よく、幾年をきても虫喰損ずる事なし、是よくためし心見たる良法なり、其味藥屋にある物にくらぶれば、甚甘くして味よし、本草に當歸を湯にて煮事見えず、日にほして、あつき中につぼに入、口をはりてをくべし、時珍が說に見えたり、

〔草木育種藥下品〕當歸　二月種を蒔、人糞を少づゝ、用、三年にして花あり、實を採置べし、土地ハ牛房など植る土にて赤土か野土に細なる砂まじりたる地に宜し、寒中人糞少用よく耕てさらし、二